様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

平成 ２７ 年　 ６ 月 ２９ 日現在

機関番号：３４５３５
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2011～2014
課題番号：２３５９３２０６

研究課題名（和文）看護学生のコミュニケーション能力を高めるコーチング学習プログラムと評価方法の開発

研究課題名（英文）Development and evaluation of a coaching program to improve communication skills of nursing students

研究代表者
井上　清美（INOUE, KIYOMI）

神戸常盤大学・保健科学部・教授

研究者番号：２０５１１９３４

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　3,900,000円

研究成果の概要（和文）：本研究では、コミュニケーションスキルのコンピテンシーを高める教育プログラムを開発し、その有効性を検討した。プログラムはコーチングに基づき、看護学生の基礎教育を意図した。39名の1年生が学習群（n=20)とコントロール群(n=19)に分けられた。学習群は6回の90分のクラスを受講した。プログラムの効果は量的、質的に評価した。学習により感情の識別、理解、調整が改善した。フォーカスグループインタビューでは、学生が自分のコミュニケーションの傾向を発見し、コミュニケーションのパターンを他者を尊重するように変化させたことが示された。本プログラムは、医学やヘルスケアの分野で学ぶ学生に適用が可能である。

研究成果の概要（英文）：This study developed an educational program to improve competency of communication skills, and investigated its effectiveness. The educational program was based on coaching, and was planned as a basic educational program for nursing undergraduates. Thirty-nine nursing freshmen were divided into intervention (n=20) and control (n=19) groups. Intervention groups took six 90-minute classes. The effectiveness of the program was evaluated quantitatively and qualitatively. This educational program improved emotional discrimination, comprehension and regulation in the freshman's Emotional Intelligence Profile. The focus group interview suggested that through the educational program, students found their communication tendency, and changed their pattern of communication to respect others. This educational program can be applied to students learning medical or health care courses.

研究分野：公衆衛生看護学・地域看護学

キーワード：コミュニケーション　コーチング　看護学生　EQ

１．研究開始当初の背景

対人関係スキルを高めるには、双方向のコミュニケーションが重要である。わが国の看護基礎教育課程のコアカリキュラムにおいて、コミュニケーション技術は、ヒューマンケア基盤技術として位置づけられており（文部科学省：看護学教育のあり方に関する検討会、2004）、看護系大学においは、カリキュラム全般を通じてコミュニケーション技術を修得し、看護実践能力を高めるようにコースデザインされている。しかし、個々の学習プログラムについての評価は困難な状況である。また、社会環境の変化に伴う若者の社会的対人関係スキルの未熟さが指摘されており（経済産業省：社会人基礎力に関する研究会による中間とりまとめ 2006）、臨床実習でのつまずきや新人看護師の早期離職の要因とも言われ、憂慮すべき課題の一つとなっており、看護基礎教育課程において、対人関係スキル向上のためのコミュニケーション能力を学ぶ効果的な学習プログラムの開発が喫緊の課題と考えられた。

本研究で着目したコーチングについては、様々な領域のケアや保健指導にコーチングを活用する実践報告がされている（相川　薫他 2005、阿倍ゆり他 2007、Izumi2007）。また、人材教育や管理者研修におけるコーチングの活用では、自己効力・生活充実感・セルフケア行動の効果が報告されている（阿部ゆり他 2007、高山由美子 2005）。しかし、教育分野における研究の動向として、コーチング学習の有効性についてコントロール群を用いた介入デザインによる実証研究は、国内ではまだ報告されていない状況であった。

２．研究の目的

看護基礎教育課程学生の対人関係スキルであるコミュニケーション能力を高めるため、コーチング技法の有効性に着目し、コーチングを活用した標準的学習プログラムの作成と学習効果の評価方法の探索を目的とする。

３．研究方法

(1)　研究会議における研究者間の討議による標準的学習プログラムの作成

本研究チームは、2009 年から 2010 年に実施した看護学生を対象とした予備調査において、コーチング学習は、学生のコミュニケーションへの積極性やコミュニケーションの問題への気づきをもたらし、コミュニケーションの本質に対する理解を促進したと考えられる結果を得ていた。そこで、その成果を研究会議で検討しながら、看護学生用に特化したコーチング学習プログラムを検討した。

学習プログラムの検討には、コーチング研究者の専門的助言を受け、鱸らによる救急救命士を対象とした教育介入（2006）について、鱸らの許可を得て参考にした。

(2)　作成した学習プログラムによるコントロール群を設定したコーチング教育介入

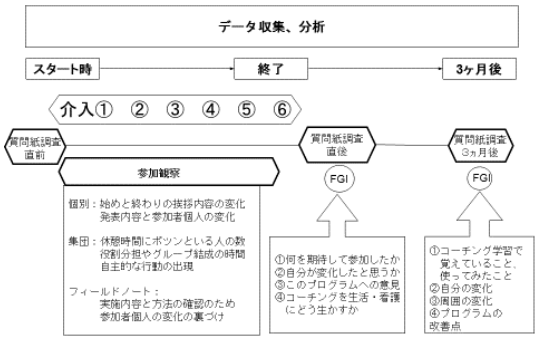
本研究チームは、全員がコーチング技法を実践できる一定の認定資格を持った看護職及び保健医療の専門職者で構成していることから、本研究では、研究者ら自身がコーチング学習の講師となり、教育介入することとした。

(3)　学習効果検証

介入群とコントロール群における質問紙による量的検証および、介入群の FGI による質的検証の 2 つを実施した。

量的検証には、EQ 理論の提唱者であるピーター・サロベイ博士とジョン・メイヤー博士の Salovey-Mayer モデルを基盤としており、高山直により紹介されている EQ に関連する 24 の質問項目を使用した。[1）2）] 使用については、著者である高山直に許可を得た。本研究においては、以下、これらの項目の質問を EQ 簡易質問と称する。

図１　教育介入と検証の流れ



(4)　倫理的配慮

本研究は、研究代表者の所属大学の研究倫理審査委員会の承認を受けて実施した。掲示による協力者の応募を行い、研究の目的と方法、制約を説明した。自由参加による任意の研究参加について、文書による同意を得た。研究参加者への圧力を避けるため、協力者である 1 年生は、研究者らが直接授業を担当しない時期の学生である。

４．研究成果

(1)標準的コーチング学習プログラムの作成

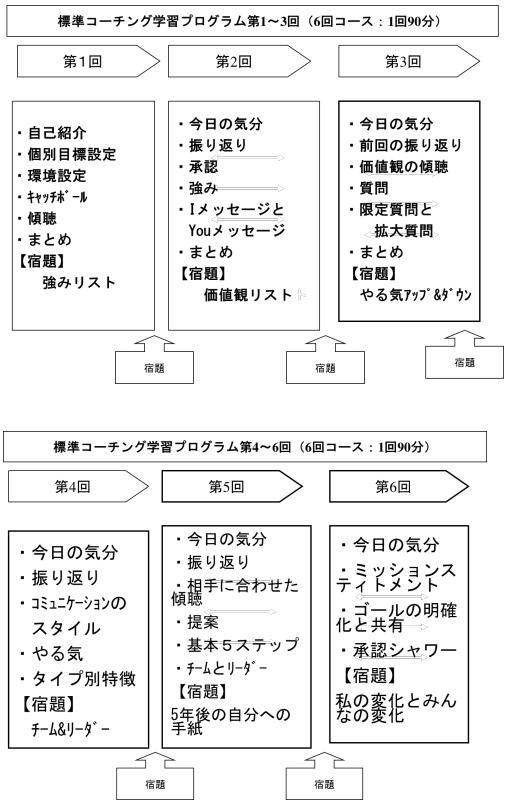
2015 年 2 月までに、本研究者らが講師となり、研究協力者へのコーチング教育介入を行ったことの検討から、基本的なコーチング技法を活用した看護学生用の学習プログラム、1 回 90 分、6 回コースを実践し、実践結果を振り返りながら、標準的学習プログラムを作成した。

プログラムは、各回に学習目標を設定し、学習項目、基本のコーチングスキルを構造化したものである。学習方法は、できるだけ体験を多く取り入れたものとした。教材は、学

習目標に合わせて、看護学生用に、学習項目を作成した。必ず各回に宿題を導入した。最終学習日に使用する模擬事例は、看護実践場面のものをイメージして作成した。

学習プログラムの実践は、講師と補助者 2 人によるもので、教育介入人数は、最大 9 人、最少 6 人のグループであった。グループ人数が少人数であったことは、双方向の体験型学習でアウトカムを学習者に実感してもらうことにつながった。プログラムを受講した学生の反応と意見、研究会議での討論で修正を加え、6 人ないし 9 人を対象とした少人数のワークショップ形式での活用に適したコーチングスキルを活用したコミュニケーション学習の看護学生用標準的プログラムとして完成させた。

図２　コーチング学習 6 回の流れ



(2)　教育介入効果検証

①　EQ 簡易質問による検証

EQ 簡易質問は Salovey-Mayer モデル（感情の識別、感情の利用、感情の理解、感情の調整）を基盤としている。

教育介入群、コントロール群の両方に、介入前、介入終了直後、終了後 3 か月後の 3 回実施した。

データ収集は、2011 年 9 月～2015 年 4 月である。コーチング群 20 人、コントロール群 19 人の計 39 人である。統計解析は、spss　ver.21 を使用し、繰り返しのある二元配置分散分析を用いた。

結果 Salovey-Mayer モデルの 4 つの項目のうちの 3 つ、感情の識別(p=0.001)、感情の理解 (p=0.001)、感情の調整 (p=0.007)でコントロール群に対しコーチング群で有意に高かった。感情の利用 (p=0.129)では有意差はみられなかった

詳細な検討では感情の識別の「言葉だけでなく、仕草や表情で自分の感情を伝えることができる」（p=0.016）、「話をしている相手の、 表情の変化にすぐ気づくことができる」(P=0.001)と感情の理解の「悲しい」と「悔しい」の区別をつけることができる」(P=0.001)、感情の調整の「物事がうまくいかなかった状況を、適切に切り抜けることができる」(P=0.009)、「人間関係のトラブルを相手の気持ちに配慮しながら解決できる」(P=0.013)、「相手が落ち込んでいるときに、励ますことができる」(P=0.001)で有意な差を認めた。このことから、コーチング学習の教育介入は、EQ 簡易質問における感情の識別や理解、調整などの一部の能力の向上をもたらし、「相手が落ち込んでいるときに励ますことができる」など具体的なコミュニケーション能力の向上も示唆された。

②　FGI による検証

コーチング学習プログラムの効果を質的に検討した。コーチング学習プログラムの全課程を学習した学生のうち、協力の得られた 9 人と 5 人の 2 グループに対して、6 回のプログラム終了後に FGI を行い、プログラムの効果に関する内容を分析した。結果、計 9 カテゴリーが抽出された。【元来のコミュニケーションに関するもの】として≪学習前のコミュニケーションスタイルの気づき≫の１カテゴリー、【コーチング習得に関するもの】として≪日常生活で自ら意識したコーチングの実践≫≪コーチングの活用可能性の実感≫の２カテゴリー、【自己の成長に関するもの】として≪ありのままの自分の発信と受容される安心感≫≪相手を尊重した関わり方の自覚≫≪考え方とふるまいの変化による自己成長≫≪相互に深まる自己理解と他者理解≫の 4 カテゴリー、【コーチング学習プログラムに関するもの】として≪コーチング学習プログラムで得た充実感≫≪コーチング学習プログラムの実施内容への要望≫の 2 カテゴリーであった。

学生は、コーチング学習プログラムを学ぶプロセスにおいて、自らのコミュニケーションにおける傾向や改善点を見出し、その後は、意識してコミュニケーションスタイルを変容させていた。それは、単にコミュニケーションスキルを変えたのではなく、お互いにありのままの気持ちを発信し、互いに受け止める体験をする中で、相手を尊重しようとする態度に変化したことに基づくものであった。学生は、このような考え方や振る舞いの変化について自ら気づき、自己成長したととらえていた。さらには、自己だけでなく他者にも目を向け、相互理解が深まっていた。この一

連のプロセスは充実感をもたらしたことも明らかとなった。

③　学習評価指標の検討

プログラムに応じた新しい評価指標については、研究期間内においては途中段階にとどまった。身につけさせたい能力項目の抽出、評価基準項目の整理を行った。介入群のコーチングの基本スキルの理解は、期待以上であったことで、到達の水準を設定したルーブリックを作成するには至らなかった。

(3)　今後の展望

①　作成した看護学生用コーチング学習プラグラムは、少人数を対象としたものである。学習項目を看護学生に身につけさせたいコミュニケーション能力とコーチング基本スキルの統合について取り組んだことで、看護学生のコーチング学習効果は明らかになった。しかし、双方向の体験型学習プログラムであることから、多人数を対象とした一般的な教育カリキュラムに導入するには、教育環境に工夫がいる。

今回の学習プログラムについては、受講学生に継続学習への希望があった。また、学生指導の経験のある看護実践者らから意見聴取したところ、学習したコーチング技術を活用して、学生がコミュニケーションの実践知を身につけるには、繰り返しの意識化した訓練の必要性があることや実践場面においてもコミュニケーション能力を評価する既存モデルが不足していることなどの課題について把握した。

②　実践場面でのコミュニケーション能力評価の既存モデルが不足していることは、看護師だけでなく多くの保健医療従事者に共通した課題である。このことは、共同研究者であるコーチングスキルに熟達した研究者（医師・看護師・保健師・管理栄養士らのチーム）で検討を重ねたことで、他の保健医療職種についても、看護職と同様のコミュニケーション能力の育成の必要性や対人関係スキル育成の課題があり、保健医療従事者の共通の問題として確認できた。

これらのことから、開発した看護学生用の標準モデルを、他の保健医療領域学生の学習教材として活用できる可能性が示唆された。

＜引用文献＞

① Salovey P , Bracket M Mayer J : Emotional Intelligence : key Readings on the Mayer and Salovey Model Dude. New York. 2004, 29 - 46

②高山直：人を動かす EQ マネジメント：技術評論社 2005,36-37

５．主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計２件）

①森谷　満　：学生には多職種参加のＰＢＬを、医療スタッフにはコーチングを、そして医療の現場に臨床心理士、ＰＢＬに心理学部学生を　、新しい医学教育の流れ’１１春（岐阜大学教育開発研究センター）、（2011）90-92

②森谷　満　：ストレス関連疾患にどう立ち向かうか？～コーチングを軸とした戦略ストレス科学（ストレス学会）、　（2013）第 27 巻　第 3 号 22-31

〔学会発表〕（計３件）

①川島美保　井上清美　野村美千江　髙田和子　森谷満　：コーチング学習が看護学生に与えた影響（第 3 報）―学習 2 年後のインタビューから（2012）．第 71 回日本公衆衛生学会総会（山口市）

②Kiyomi INOUE, Mituru MORIYA, Miho KAWASHIMA, Michie NOMURA, Kazuko ISHIKAWA-TAKATA ： A Coaching Program for Nursing School Students and Emotional Intelligence Quotient(EQ) （2014）. The 7th International Conferrence of Health Behavioral Science,London（ロンドン）

③ Mituru MORIYA, Kiyomi INOUE, Miho KAWASHIMA, Michie NOMURA, Kazuko ISHIKAWA-TAKATA：Practice of Narrative Coaching and Happiness Activities（2014）. The 7th International Conferrence of Health Behavioral Science,London（ロンドン）

〔図書〕なし

〔産業財産権〕　該当せず

〔その他〕　なし

６．研究組織

(1)研究代表者

井上　清美（INOUE, Kiyomi）
神戸常盤大学・保健科学部・教授
研究者番号：20511934

(2)研究分担者

野村　美千江（NOMURA, Michie）
愛媛県立医療技術大学・保健科学部・教授
研究者番号：50218369

川島 美保（KAWASHIMA, Miho）
日本赤十字豊田看護大学・看護学部・准教授
研究者番号：90380328

髙田 和子（TAKATA, Kazuko）
独立行政法人国立健康・栄養研究所・そ

の他部局等・上席研究員
研究者番号：80202951

森谷 満（MORIYA, Mituru）
北海道医療大学・公私立大学の部局等・
准教授
研究者番号：50550357

(3)**連携研究者 なし**

(4)**研究協力者 なし**